

小竹ムラの集団構成を考える

(令和6年度第6回県民考古学講座「小竹貝塚研究プロジェクト最前線」より)

富山県埋蔵文化財センター

小竹ムラの近親性

Vol.23で紹介したように小竹貝塚の12体の人骨のうち5親等以内の近親性を示したのは1対(2体)でした。確率から言うと6分の1(約16%)です。さて、この割合が果たして大きいのか、小さいのか、すなわち小竹ムラの集団は近親性が高いのか低いのか考えてみたいと思います。(注:12体については同時期存在していないものもあることから、近親性はより高くなる可能性があります)

縄文時代の集落の人口

そもそも縄文時代の集団人口はどの程度だったのでしょうか。これまでの縄文時代研究により様々な見解が出ていますが、著名なのは小山修三(1978・1984)による人口推計で、縄文前期の国内人口は約11万人、村の一般的人口は30~40人としています。また、近年では各地の研究者により竪穴住居を中心とした環状集落の規模から類推する手法が有効とされ、遺跡による多様性はあるものの、一般的に竪穴住居5~10棟、25~50人程度で、大きい集落だと100人を超えるという事例もあります。ただし、これらの多くは台地や丘陵上に位置し、大規模な発掘調査がなされた比較的安定した山間の集落であることから、海岸部の小竹貝塚と単純に比較できるかどうかは注意しなければならないでしょう。*小山修三 1984「縄文時代」中公新書



東黒牧上野A遺跡（富山市）



小竹貝塚の範囲

小竹ムラの人口はどの程度

小竹貝塚の人口を推測するのに有効なのは、やはり埋葬人骨と考えられます。新幹線路線敷地内の発掘調査では少なくとも91体以上の人骨が発見されています。小竹貝塚の墓域は新幹線路線敷地内だけでなく、周辺にも広がっており、発掘調査された面積の約9~10倍ほどはると類推しています。また、貝層内に埋葬されなかった場合、骨が残らない可能性もあり、それを加算すれば1,000体以上が埋葬されていたと考えられます。

出土している土器は前期中葉から前期末葉で、年代でいえば6,300年前から5,700年前の600

年間となります。単純に計算すると年に 1.7 人が亡くなっていることになります。これには胎児や幼児も含んだデータとなります。年に 1.7 人が亡くなる集団をイメージしてみると、あまり大きくはない町内会といったところでしょうか。

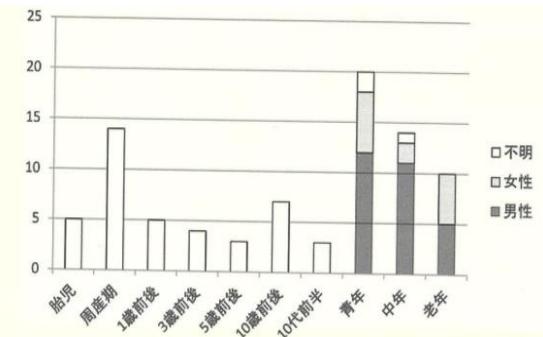
次に亡くなっている年齢から人口を推計してみます。ちょっと乱暴な計算ですが、右表から胎児は 0 歳、青年は 20 歳、中年は 40 歳、老年は 60 歳として平均値を取ったところ約 20 歳という数値が出ました。死亡時年齢の平均が 20 歳なので、これに 1.7 を掛けると人口は 34 人と推計することができました。いくつも大胆な推計値を用いているので、信ぴょう性は高くないかもしれません。とりあえずの仮説として、従来の縄文集落人口研究と相違することはありませんでした。

小竹ムラの集団に当てはめる

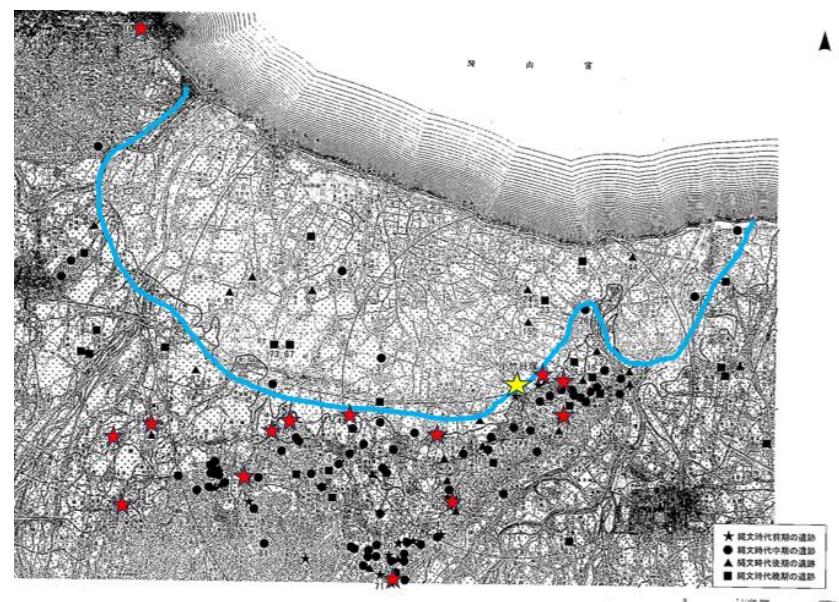
さて、ここで冒頭の近親性 16% に立ち戻り、人口 34 人に当てはめた場合、5 親等以内の近親者が 5~6 人ということになりました。少なくとも 1 家系はこの地で生活を続いていることが窺えますが、残りの 30 人弱がお互いに他人同士であるとしたら…どのような集団なのでしょうか。小竹の地に定住し管理する一家族のもとに近隣地や遠方からシジミを求めて来訪している様子。など様々な姿が浮かんできますが、元になるデータの母数がまだ少ない状況に加え、データ人骨の時期差を加味して検討していないので、ここでは妄想を楽しむ程度にして、今後のデータ蓄積に期待したいと思います。

小竹ムラの近隣の集団

最後に小竹ムラと交流があったであろうムラがどこにあったかを見てみましょう。右図の水色のラインは縄文海進による海岸線で、黄色☆が小竹貝塚。赤☆は前期の遺跡になります。近いところであれば直線で 5~10km 程度、離れた所は数十 km はあります。しっかりした道などない時代、集落間をどのように移動したのか、どの程度の頻度で交流したのか。今後遺跡間の共通性や共通する遺物などの研究を進めていけば、見えてくるものがあるでしょう。（河西健二）



小竹貝塚埋葬人骨推定年齢



主な縄文時代前期の遺跡

蜆ヶ森貝塚、針原西遺跡、北代遺跡、古沢 A 遺跡、東老田 I 遺跡、中山中遺跡
圓山遺跡、南太閤山 I 遺跡、小泉遺跡、吉峰遺跡（立山）、上久津呂中屋遺跡（氷見）